

常世の森の魔女

THE GRAIL OF HEARTS

スーザン・シュウォーツ

嶋田洋一 訳



訳者略歴 昭和31年生，昭和54年
静岡大学人文学部卒，英米文学翻
訳家 主訳書「天命の絆」ダンカ
ン「不思議の国トリプレット」ザ
ーン（以上早川書房刊）他多数

NF=Nonfiction
FT=Fantasy
HB=Hi! Books

とこよ
常世の森の魔女

〈FT183〉

一九九三年八月二十日 印刷
一九九三年八月三十一日 発行

（定価はカバーに表
示してあります）

著 者

S・シュウオーツ

訳 者

嶋 田 洋 一
しま だ よう いち

発 行 者

早 川 浩
はやがわ ひろ

発 行 所

株式会社 早川書房

郵便番号 一〇一

東京都千代田区神田多町二ノ二
電話東京(三三五)三二一一(大代表)
振替口座番号 東京六〇四七七九九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求
めの書店にてお取替えいたします。

印刷・株式会社享有堂印刷所 製本・株式会社明光社
Printed and bound in Japan

ISBN4-15-020183-8 C0197

庫 FT
〈FT183〉

とこよ
常世の森の魔女

スーザン・シュウォーツ

嶋田洋一訳



早川書房

3379

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1993 Hayakawa Publishing, Inc.

THE GRAIL OF HEARTS

by

Susan Shwartz

Copyright © 1992 by

Susan Shwartz

Translated by

Yoichi Shimada

First published 1993 in Japan by

HAYAKAWA PUBLISHING, INC.

This book is published in Japan by

direct arrangement with

RICHARD CURTIS ASSOCIATES, INC.

壁ではなく橋を造るすべての人々に

おまえがわしに祝福を求めれば、わしはひざまずいておまえに許しを乞う、そのようにして生きていこう。お祈りをし、歌を歌い、昔話をし、蝶のようなければしい連中を笑いの種にし、卑しいものたちの宮廷の噂に耳を傾けよう。その連中の話に入り、だれが勝ちだれが負け、だれがのぼり坂でだれが落ちめと、神のお使いのようにこの世の秘密に通じているふりをして語ろう。

——ウィリアム・シェークスピア『リア王』

第五幕第三場 一〇～一七行

（小田島雄志訳）

本書の執筆に当たって迷惑をおかけした友人・知己のあらゆる人たちに感謝します。とりわけ、リチャード・カーティス、トーマス・ドハティ、クレア・エディの各氏、およびジェイン・ヨーレン、エスター・フライスナー、ジュディス・ター、エヴァンジェリン・モーフォス、マリ・クルーガー、サンドラ・マイセル、キット・カーとハワード・カー、ハリー・タートルダヴとローラ・タートルダヴ、ベン・ジオン・ラパポート、パーク・ゴドウィンの各氏に。

常世^{とこよ}の森の魔女

漁夫王の乗った小舟は、プロセリアンデの中心にあるブルンベイン湖の上で静かにたゆたっていた。夕風とともに空が藍色に染まってゆく。不透明になった水面は、まるでライムと櫛の林の緑に嵌めこまれた黒真珠のようだった。宝物箱のようにきらびやかな蜻蛉が一匹その上をかすめ、プロセリアンデの森の奥へと飛び去ってゆく。靄と暑熱に木の葉が喘いでいた。

いかにアムフォルタスが聖杯に仕えていようとも、魚を意のままにすることはできない。彼は魚影の見えない水中に目を落とした。何とも珍しいことに、今日の彼はみずから一口の休暇を認めていた。しかしそれも失望に終わりそうだ。日没の最後の残光が湖を赤銅色に染め上げる。水面が波立ち、光が揺れた。以前ビザンティウムを訪れたとき、彼はいくつかの大きな教会ですばらしいモザイク画を見たことがあった。そんなモザイク画の中に見たような顔が、ボートの立てる波に歪められて、細波の上から彼を見つめ返している。暗く悲しげな日、砂漠の太陽に向かって何年もひそめられてきた眉。砂漠の気候は、今の彼にはほとんど名残をとど

めていない。太陽と砂に対していつも目をすがめていたための皺も消えかかっている。それでも皺には汗がたまっていた。

暑さにもかかわらず、彼は軽甲冑ライトメイルを身につけていた。甲冑を着けて水の上に出るのは愚かしいことだが、巨大な敵のこれほど近くに防具もなしで身をさらすのはもっと愚かしいことだ。彼はさらに家紋の鳩を縫い取った白い絹サールの外衣と、黄金に絹紐をあしらった勲章を身につけていた。黒い髪は今もまとめて兜をかぶりやすいようにしてあるが、実はもうその必要はない。彼は平和な時代の戦士、戦装束いくさの僧侶だった。もっとも、今を平和な時代と感じたことはなかったが。

波に歪んだ顔に向かって、彼は皮肉っぽく問いかけた。（僧侶にして王かね？　メルキゼデクはサレムの王にして司祭だったが、わたしはメルキゼデクではないし、そうなるうと思ったこともない……）しかし父親の意向はまた別だ。ティトゥレルは老いたる身の責務を彼に託した。彼はそんなものを望まなかったし、予期してもいなかったのに。そして父親は神に感謝すべきだと言う。神が砂漠の戦での耐乏生活やヨーロッパでの武勇と引き換えに、モンツアルヴァシュの静かな空虚さを与えてくださったから。彼ら父子はこのプロセリアンデに埋葬されているのだ。父は生きたまま墓の中に、子は王座の上に。

兄のブロンなど、本人が仕えるべきだった祭壇の下に埋められている。（わたしは神の御ために死んだのだ）水面に反射する日光に目が眩み、アムフォルタスは顔をしかめた。

年若い従士たちの中には、この森を指して魔法がかけられているのだとささやく者もいる。

それはアムフォルタスにも信じられることのように思えた。彼は湖の岸の向こうに生い茂る木に向かつて考えた。（それほど力があひながら、小魚一匹分け与えてはくれぬのか）彼は魂の漁師となる運命らしかった。

ブロセリアンデではたしかに不思議なことが起きる。森に足を踏み入れるほど勇敢な、あるいは愚かな、あるいは頭のおかしい旅人は、やがてどこからともなく戻ってきたとき、その姿をすっかり変じてしまっている——そんな話がまことしやかに語られていた。森は根方^{ねかた}から力を吸い上げ、この世界に網のような枝を広げて、魂をからめ取ろうとしているかのようなだった。若者と聖者と狂人のほかには誰の足にも踏まれたことのない森の小径は、水車に引きこまれた水が木っ端をすばやくひたたくように旅人をひたたくり、思いもよらない岸边に打ち上げる。王たちのカムロット、ソロモンの舟が聖なる印を持つ少数の者たちをサラスに運んだ神聖な岸边、あるいはもっと世俗的な、勇氣と良い武器を持つ者が富と冒険を見出すことのできる土地。

その半分は荒々しく危険な場所だ。残る半分、すなわちモンツァルヴァシュを囲む土地と森のようなところは、聖なる場所であり、守られている——とはいえ、とどまるにしろ外に出るにしろ、よそよりも危険が少ないというわけではない。

かつてはアムフォルタスも、そんな危険な街道を駆けめぐる騎士の一人だった。アンジュのガムレットや、王となって放浪をやめる前のユーサー・ペンドラゴンと同じようなものだ。既知の世界の地図が、自分の甲冑や貴婦人の喝采と同じように身近なものだった時期があったの

だ。彼はザザマंकとシビーリヤとサタリエで戦った。カラトラヴァとエヴォーラの騎士に側面から突撃して、アル・アンドルスの解放に力を貸したりもした。

彼は王冠を差しだされたが、兜に付ける羽根飾りさえ辞退した。軍団の指揮権を委ねられそうになると、一、二の従士だけを連れて遍歴の旅に出た。

誰よりも祝福されながら、聖墓の前では驚きに打たれて膝を折り、ゴルゴタの丘では涙を流した。その名は暑熱の中に輝き、プロセリアンデの苔むした奥地を飛び交う蛍のような鮮やかさを見せて、やはり蛍のようにたちまち消えようとしていた。

間もなく鐘が鳴り、アムフォルタスの水上での一日は——老騎士たちがなかば非難を込めて〈狩猟の日〉と呼ぶ一日は——終わりを告げることになる。彼は聖なる苦行に戻らなくてはならない。神聖なる務めが、鎖帷子チェイン・メイルをとらえて彼を城に引き戻そうとしていた。かつては彼の父ティトゥレルが住み、その前はその父が、さらに連綿と続く家系をさかのぼれば、アムフォルタスの兄がその名を受け継ぐ初代ブロンが、また聖書に名を残すアリマタヤのヨセフが住んだ城だ。家法はこうなっている——聖杯の地上における安置所であるモンツアルヴァシュを統べる王の統治力が弱まったときは、その息子を召喚して統治の任に当たらせる。たとえどこで何をしたいようとも。

この家法に従うのは、かつては何でもないことだった。今はそうはいかない。

少なくとも一日一度、王と定められたアムフォルタスは騎士たちを閲兵し、聖杯を高く掲げねばならない。彼がはじめて小馬に乗ったときのことを知っている者さえ少ないというの

に。空気と光と音が変わり、彼の周囲で世界そのものが震え、変質する。この毎日の苦しい奇跡だけがティトゥレルの生命を支え、アムフォルタスの従士となる前はその父親の従士だったグルネマンツのような老齡の者たちの健康を保っているのだ。彼らは今も強健だった。恐るべき老人たちは奉公を押し売りし、その見返りに彼の奉仕を求めた。それを拒んで彼らに聖杯を拝ませなければ、老人たちはすぐに衰弱し、子供に返ってパンをくちやくちやと噛みながら、ひび割れた甲高い声でおしゃべりを始めるだろう。だめだ。尊敬する者たちをそのような目に遭わせることはできないし、父親が永らえるのを拒むこともできない。ティトゥレルにとって、すでに生そのものが重荷となっではいるのだが。

聖杯の重みを考え、アムフォルタスは身震いした。彼は毎日それを持ち上げねばならない。毎日両手で全世界の重みを支えているように感じ、彼を地面に押し潰そうとする重みを懸命に押し返しているのだ。熱く貫くような聖杯の炎が筋骨に沿って噴き上がる。身体も聖杯ももろともに、月の彼方から届く光に輝いているのではないかとさえ思えてくる。これほどの責務に耐えねばならなかった者はかつてない。しかしこれは彼の責務、最後の晩餐以来、彼の家系が負ってきた責務だった。

アムフォルタスの口許で筋肉が小さく痙攣した。聖杯を管理するというこの役目も、まんざら地獄の責苦ばかりというわけではない（このようなこと、口の端にのぼせるだけでまったく冒瀆にはかならないが）。ある瞬間、炎が彼の心を焼きつくし、彼はもはや息子でも王でもアムフォルタスでもなく、歓びに満たされた単なる一個の存在になることができるのだ。しかし

その瞬間はあまりにもすばやく過ぎ去り——この世界への帰還はわが身を焼かれるような鋭い苦痛をとまなう。聖杯をおろして覆いをかけるときには、手が焼けただれていのではないか、傷ついて血を流しているのではないかという気がいつもしていた。一人の人間が焼きつくされながら無傷でいるというのは、聖杯のもたらす癒しと食物にも劣らない奇跡のように思えた。

ブルンベイン湖がさざ波立ち、アムフォルタスは釣糸をたぐった。晩禱ばんとうまでにもう一投くらいできるだろう。モンツアルヴァシュの領主となるまで、彼は釣りなどしたこともなかった。騎士時代の彼なら、釣りを安逸な、偉丈夫にふさわしくない遊びと蔑んだことだろう。しかし父親はこう言って彼を諭した——そうかもしれんが、主もまた靈魂の漁夫ではないか。だから今、アムフォルタスは魚を獲り、束の間の自由を慈しんでいた。

この貧弱な楽しみのために彼が失ったもの、それは今の彼には望むべくもない冒険の数々だった。はためく紋章旗、輝くラッパ、碎ける馬上槍。大きな都市の城壁の外で行なわれる、法と神に敵対する者たちとの正義の戦い。都市の支配者の眼差しと称讃。アムフォルタスは湖を見つめた。まるで湖面のモザイクの中に、かつての彼の生き方がちりばめられているとでもいうように。苦勞のあとにはいつも喜びがあった。彼は金銀や房飾りのついた絹の薄物のそばではなく、自分の甲冑のそばに眠った。彼は仲間たちと腕を組んで、白い城壁に囲まれた都市の路地を歩きまわった。殴りつけるような陽光が照りつけ、へこんだ盃の中の薄赤いワインをぎらぎらと輝かせていたものだった。現地の人々は彼らのために道をあけ、港には潮と麝香じやこうの香りがあふれ、彼らは黒い髪をした女たちの歌に聞き惚れた。女たちの白い歯は太陽のように

輝き、その情熱は真夏のように燃え盛っていた。

あそこはよかった。音楽までが、今は讚美歌であり、聖歌であり、鐘の音——ああ、モンツァルヴァシュの鐘が鳴っている！ 鐘の響きに合わせて湖面が震え、人々を祈りの場に、アムフォルタスを試練の場に召喚している。

アムフォルタスは活動的な男だったのに、今は黙想を強いられている。神もご存知のとおり、彼はモンツァルヴァシュの美德やその目的の神聖さを否定しているわけではない。また彼の父親の権限として油断なく守られている、つき従う者たちへの指揮権を認めていないわけでもない。だが放棄した人生を惜しむのは、別に罪ではなかった。彼が打ち捨ててきたのはすべて武器——それも大量の武器だった。釣竿を手にしたまま、アムフォルタスは渋い顔で聖槍のことを思った。この小舟の上、プロセリアンデとモンツァルヴァシュの力が結びついて守護しているこの静かな湖の上にいてさえ、アムフォルタスは昔から使っている剣を身につけていた。その剣よりもはるかに古くはるかに貴重な聖槍を守るために。

それは古代ローマの軍団兵が世界を支配するのに役立てた、ピルムと呼ばれる一本の槍だった。しかしこの槍は、それが本当に古代ローマの軍団ほども古いものであるとわかる前から、また光の悪戯ではなく本当に穂先が光を発しているのだと知られる前から、雨や露に当たったわけでもないのに黒いしずくを滴らせることがあった。それはこの聖槍が、十字架にかけられたキリストの死を確実なものにするため、あるローマの軍団兵によってキリストの脇腹に突き立てられたものだったからだ。